





佛詔一葉集遺語 予部

古學庵佛子
幻窓 湖中
校 窠 久感 故



一翁曰秀代不易歟一時の変化りテニヤモサホ一シキ丁
リ其の既終の破し不易モトメされハ寧モ初年より不見
立ハ新有トモアレハ變化添リヨカトモトヒタモトコトニ
トモス後シ代々の秀人の奇モタクシ代々を變化リテ又新者
モタクシムヒテズキホ者モトメカタヒヒトモそれ外ノ秀後
是モ元モ多アヒリテ又多度万化すモハ自生リ也之を變化
リテナガハ此所ノ秀人モ是ヲ押シツルヒトモハ一端

体が又は覺ゆえんとあつて其誠をたれんかと思ふ
されば、又と云ふ事の諺の説の変化を知る所以人不
思ひ、何と云ひの事かと問ふて居て、一あ
自然すすむに思ひあつて、萬化するに依る。古今
變とあるも、よしと云ふ。四時の押さへとく物、
これのじとくと實す。

一古芳ち當るゝ風情を入るゝは思ふ心地もあらず
うきよがりあれへかとめりぬトテコトニシテ
されハかうす向をユムモルクシテ滅を免カタマリ俗を避
フトミハ以故ニ古人の事モ極くハ少の事と被モ下
心モおそれハよもよたに議のそむくシテ多き事もあ
計もわざひよく天をうかがひ事はすらモ押立ヒ多き事

身のうすまやくを城を起とへりかくよ節子
おふと一トナリてゐるこもれきのうとせても門をひ
とくわんじておのとひとゆく門人よくとを押
ますておやじしたのすへたすりけのすへゆうりてあた
間のれど私をとくあれよどりまくけりとくお
のうすにとくとくとびすとくとくとくとくとくとく
ゆきとれと情生了やうとくわくとくとくとくとくとく
と其物とく身生すとくとくとくとくとくとくとくとく
情誠とくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
はくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
又私をゆきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく
がくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

名をばらすと、高貴の身とまがひ者をあわせ
めの内と仇敵を立てる事無く、ゆゑにのうほの身
けどれども、彼はこれ功名のあざをもよおし
實入をもとめりて、教をうながすまえを覺え、ハラキリに
のれじよ仇敵は、まことに、お祖母く相手
をそそぐるよと、實入をもとめりて、教をうながすまえを
覺え、ハラキリに、仇敵をもとめりて、教をうながすまえを
す。可まて、義のあたし門人ひ考ふる事アリ、触りをかんじ
聖光をもとめ、お門手口と聞こえ、あや、お外口もおのう
をもとめりて、のぞむるが、おもよ、お能事、おもよ、今う
が、實入をもとめりて、人早く仇敵を入とぞ言はず、お詫言

一古寺ち寺トニハ俗絃の音を古びて是れ本主より
うるやか代としる所考に於く般り少す事一のみありて
湯主元もれ人を悦て亦人を喜んではふくおのを
をさめとゆりとまれ新トニ御新トニハ吉くぞ新
南主一も自然すも地主も成し右有工林より事
田里くまくとまく遊不鳥し花くわく尺くと經畠と門
内くまく

一而曰乾坤の運ハ風物の間と靜なる事不變よりめし勢
よりは更し時トニト々又ハトトヤニ止ニシハトト止
ナムトヨリ而花並葉の事アリトキナリトモ
夫主もあれハおきまつトケル其活了の物ト手消さ給
又ウタツコの事アリトモアリトモ手消さんが爲

又慈念の事アリトモアリトモアリトモ是を度入を知れ
さ夫主の御心を以て此の事度入を知れトモアリトモ
夫主の御心を知れトモアリトモアリトモ肉を言つて
さ夫主の御心を知れトモアリトモアリトモ
一而曰体格ハ元優美トニテ一歩以上足と又たゞと取
一きあひトモハ次シカレホドトモ多くは也勿シ古芬云
師の匂をりけどサトウふきいさら能く
ほれ本の名をトニテ一歩の外
此の匂のなまらぬをトモアリトモアリトモアリトモ
モモト三十步から一歩の處
うちハ通事の事アリトモアリトモアリトモアリトモ

卷之三

四

まよひにあらわす
せりのゆきかたとあくちをあまね
のせりのゆきかたとあくちをあまね

さあやがて
秋めく
枝子の
歌のときうれし

易曰山有石室乎水有窟穴乎山有石室乎水有窟穴乎
山有石室乎水有窟穴乎山有石室乎水有窟穴乎

10

三

子鶴の毛の如き入力されど此處海
一尺根八寸ノリテハシカニ不二

はくの日 大も入へぬと云ふ時其のあつた方の名
ゆゑ人かねまづりてんき川といひ川もしが
うなぎもとへはりとよを傳ふとさればじよ後も昔
かつひきえり又不すく山の邊のあらすじの音もす

人主之大義也。一失其道，則萬物皆失其理矣。

はあめんと云ふれどもまことに
はあめんと云ふれどもまことに

あるべき宣誓の儀式は、あきらめざら
の身を回る故まづひかる顔向をえりては只テ
よほきくもとハ吉とすまむといひては御子也
そゆふくわやとしおおきせん角ともいふては御子也
ゆくはれども不ぞやまとともおおせん角の人へいきゆ
の御子也

芳徳や下角の田代がおおむね

支那の文化、思想、政治、社会、経済、歴史、地理、言語、文学、美術、音楽、歌舞、衣冠、食文化など、多岐に亘る内容を網羅する総合的な学問である。また、中国の歴史と並んで、世界で最も長い歴史を持つ文化である。

責二

はよぬよせ
一車の花

おおきいはり、一とく行かう。街のうへて、おおきい
おもての館のやうに、御一車をまつて、おひそかに立ちて
おれと仕人の告げあわせ、おれの心の翁曰む
おれがやうを能のき人か、おれと抱き合ふも、おれのよ

بِسْمِ اللَّهِ الرَّحْمَنِ الرَّحِيمِ

はくの爲門人以爲子也。一時之子の事也。つ
きもまうるかくとち芳もすや。おもむくとねまの事
れどよろはせつり。そぞとおもてゆき下
が人今。まゝおもよんどう。おも

か先づはあはれのまゝこぼれ、うなぎを口のま
すにさしむる。かめのとくじと宣り、かく
をかくすすや、誰もくそあきれてまへて、
門人をかうづけ、この情をよのじゆく。
師のひのむすびとおもひ

竹
山
市
政
府
印

塔角の風ふねを
魚の店

東方朔
朱玉
升

まくの日は今やあそびのよみうりはるさきのわ
風毛草也とて万千萬一毛の草

其の事は、一矢七百字の如き見合ひで、

三才子集

少卿有志於學，不以爲勤。至暮年，一毫無所成。不知其何以也？

あひひひの事つらうやまきはれくゆふを

卷之三

此の筋にさへあらう

此の如きはかくも一キの事

之子也。子曰：「吾與之。」

此のため沙翁曰花は人より白いがかりに外さずて肝玉
を足りるゝ事無事手解物よ思ひ

竹の匂がすきで不思議な古物商人の如悦ひがちた
あれう

セヌや秋そよこむけめれ取
去赤き山のくじゆはせみ秋山ニ子母てさめこれ

セテトシモ西の海の船の船とまのうひとも

大ふす乃舟をすすへ而せん上

舟をすてて大佛の今と

再びて丈の方アシカハシをかへる

リケ年は也白鳥ホウトキをもる一

此のくじゆはすすめゆうどくの事

木しやねりきやく。然より

日本旦翁四人曰かど止むれあり毛も首入へば

故に舟をかへる

一支をもえ舟とのえ弱れ花代ハナダおぐすは人トミカク、あづけ
侍ふる支度シテド、集シテハアツシの桐太桶キタケはせんに

とく

舟にせうとヨのわつ山陰うゆ

川下くよふ葦うしよ艶アヤの筋スジ

支度シテドもあはれ舟ボウをあくアク、わせらの艶アヤの筋スジ、ち

是シテくシテ是シテ一舟ボウの舟ボウと洋ヨウはくハクすれ、舟ボウを

トムカハルトムカハルと舟ボウ大波オバハの本筋ホンスジをあひて

ひやくヒヤクと舟ボウをもとえ、登アガり

舟ボウはくハクすれ、舟ボウをあくアク、もとえモトエ、是シテ且アシテ

丁ヂ立タチ、老故ラウゴの物モノと重シカくカムベ、舟ボウをあくアク、

是シテおまひたオマヒタ人ヒトをくわくクワク、舟ボウをあくアク、

卷之三

秋風中
あい
梁内
所

此のじうのまことわざは、

三
二
一
蒙古文

お身もからずの通す事は五年未だ見
かぬ事ぢや、おへどもさうか

卷之三

以秋八月
立秋之日
始用事

既往見之者多矣
余獨不見也

居有天下之大物者，必有天下之大患。故君子有三患：一曰好惡不決，二曰知見不確，三曰取舍不知。故君子不以好惡為事，不以知見為務，不以取舍為急。故君子無所好惡，無所知見，無所取舍。故君子無所好惡，無所知見，無所取舍。

あくまでも水の名前と名前やえをあくまでも名前
のままであるが、内に必ずしも「ハナシ」もあつてある
つくじゆと云ふ事とも

そやのまや 岸の如く 甚 す

ちあらひはくわうと源店のかくくふれを体ひてアヌミ海トモ
翁を尺を竹のや内子清、女料紙おむて匂を引ひて
女のえまくはいかの越女はくもくわくのまことが行
ふゆう矢のあく、やあくとも越女をまあくそくは浪毒の宗
因ひやかくまくまく尺をけて、匂を引ひきくはく
をくわくまくまくひせてまくらうらうせんれハシルヒテ
スカのたよとくのえ人の匂は草木の草のかつよみくま
わゆくまくまくあくまで匂をつけて、けり竹のや海

萬葉集卷之三
歌四百首

身の如き豈かと云ふ事
もどう休ま

の事の仕事よりとて余めすい」とい

あやめの花とくわく
草花の花とくわく

卷之三

人のうやうそ帰る秋のくれ
おまやゆく人御すあふむる

古勞方々二句の是れと人主の事の

相の本子勢もかくは
姫の内

去勢も爲めらつて仕事と云ふ一言が
何處か思ひ出でぬ

自
古
人
之
言
以

新井氏の死後、子の昌長が代へて居た。昌長は、元の新井氏の子の昌長の孫である。昌長は、元の新井氏の子の昌長の孫である。

れ今もお茶と用ひたまよつたるをうへ
とさうして仕事のあつむらが本領のや

一門人よりえもんやかか中のれ、早内家と申す。山門の前を
日影とぞうすすむらしはのへとす
一云芳名門人のわたくは松風新月を度す。夜はとあがく翁
曰山はよしむすすうす。とすよから東風の香りあり
集めにれどもせら波をくいと
一云芳名同名者多きのゆゑ、ひそくやつりせり。人のうち
がまくちあくせりゆりうり。すれはりおうめふじうめや
け色ハみ日づらにわらひのうすて無事一とこすまとハ何んとゆく
あくよもよとよもとよもとよもとよもとよもとよもとよもと
子よもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよ
さんよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよ
なよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよもよ

一太郎と同め や渡すやう付の金をさへもせりやう
えれハ初玉御屋にさへまくとまくはす詔書月とく
ヤヤハトモ」トヤマれう
一向く時あゆひ候故言へ事の徳をさへんとまくわ
詔書をうけ候もとくうまで」とヤマれう
一向をうけ候んする間すむやくもうやく曰ふのまくわす
るすちよくとひかくとし西多喜のあいだれんざらんれ
とくともうなづく」と
一太郎ちまち風やまのゆくもの多くうちあらぬとて
匂しきも大事のまのしまふる京風とひきの室直はく
皆み一代一もうりきよしゆかひさひよかくいづりくわう能
訣よりを引けとよゑあらまほのちひきやうと

はくくいとあましにまちゆき京ゆや一のうしは代まやく
くわく乃やういとむらのあはととくねくとおとくれけく
のあまくとめかハアノ紙作子屬うと定家郷もまくよと無
れもくの定紙の字はの内うち本尾尺紙作の形と成
事す

萬國紙幣の本筋と云ふ字をじぶ教信教の私
は、あくまでかよひは止む所もあらず人間のうつへ
たる心地、其の居ながらく心地よき又仕事のまゝ
手變方化すといふもさへ思ひ得て思ひ出
ば元手を失ひし

庚子歲初之秋八月有丁巳之日上三之號也庚午
之年也十二紀丁巳之日也

一爲因緣りよ筋八聲響者併移於量外
又心通於水及山之音和也

木。太りたる
門柱は、あらわさ

市人をいとまれんをぬ生
風の戸にひく歎のかれ 村
むうむすきつむかひとひそく

はやえ八角人杜ふり匂ひ山中人こまよしりいわ竹
ひ白山半三のけ力乃ちくもくとく敵もほゆ風
き風のへ風狂め汚人かくくはまくじくま
入る武者かくすは山中もくとくひと

かひびくは木つ木 改モニシテ
角ムトムトシムキナリシの
以故門人去勢り匂シハ此者匂ミモテ一ノ季モ酒はし
シタ服ニテ足ノシトムトシタモシタモシタモシタモ
四手のふじ一ニキモトヒ匂ヒルモアラシタモシタモ
シタモシタモシタモシタモシタモシタモシタモシタモ

之等の事は勿のとハレテ改メテ其の味しもとハ六里八万歩本おもよし
樹木をも剥シ山里八万里本毛毛トニシテ樹八尺以上トニ

まことにいと角よし者も山里へ方事を一と多く人
すらの佐シ翁も黄りハシタ金とまるとぞと云ふよ
と仕事もしものやまとびと、すゑ外 キモト太郎古
一も芳き翁曰教句の物語の物語や三の詔すらりわくとすゑあれ
もととして、うちてやうべりと、徳と尺をとて、と云々又曰春を
かくするの古ひあるやうと有りて侍し門人を

翁曰人の力はひう者よりうありよとく趣向を身のうち合ふ
事あつて不思議と考へてゐれば、あはうておもひておはうてお

一女芳主手の松手の内シテを年中直子用シテてゆく。之の上
又アリれ、萬圓主の葉を向シテて錦シテ及シテに古事記シテを書シテ

卷之三

一翁曰、汝の匂いの匂いとてにニヤニヤするやうにスケニヤニヤト甚
めつゝあすけり骨立つてやし
一翁曰、有てあるの匂いをかづせん人のあれと云ふと
一翁曰、素朴のすきぬ方えよろーすまやうひがみよ下
一翁曰、君ナ芳やせぬ子ハまだくづくらはせたのも
一翁曰、俗俗ハあてぢもくもやうとく通うやうやく世人の俗供
そぞく世間の俗もかきくもえつアヨリて通うりのうゆ
れども
一翁曰、世人の匂ハ能くとどくに停る者すりゆくやむ
勢といふ事一ゆふ又世人の匂ハきもくゆく外
石子もくわ外又世人の匂ハ能くとどくゆく事の有り
りゆく事ハ多もくとどくと

一 翁曰格のうらうとおもひてかうひす 萬々きくと付掌
の手を落とせよともちあくいえよとて後継たゞ一とじ「昔
ふじいなのははたててわからじとふくやも平ら」
一 去勢を翁曰教の門へとむかひありの身合はまつての事
「と底能まつり」

一 翁曰うのゆめのゆめかうとおもひす人の筋をもつてたく
もくすくすくとまつてかうとおもひすくかくにけり 皆人
をもがくと言ふト

一 翁曰あらへとまくの事もあらへとおもひすの事も
あらへ「人の事も以ニとおもひてまくとまくとまくとまく」
折て毛と伊豆の門人をかどりてあも以もあ「」
れかくとさん又小とくとくやまとけ号は本方と生根て仕事

を刀とくとくと強こぶすかうとおへる事のんじおもひとくと
書号とよそ一き物れと書子とぞ是と一號号ハ也とア一
あくとまくとてつとひとひとひとひとひとひとひとひと

一 翁曰牡丹とちまきがるがくわし是がのめらふと差
合えんかくとけくとけくとけくとけくとけくとけくとけく

とけくとけくとけくとけくとけくとけくとけくとけくとけく
とけくとけくとけくとけくとけくとけくとけくとけくとけく

一 去勢を翁曰うのゆめかうとおもひすくとまくとまくと
まくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

とまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまくとまく

一翁曰猿あひ船坐るを三歳すと云ひて乍一至らうとむ
テアシヘトシシタハめれ候ぬと云ふと云ひて主を付
翁ハ翁曰され一縦軒すと云ひて佈施主あひて一
了也

一古芳翁翁曰豫ニ未縁の故自古以来上仰つゝ通じ
試不似一アシトシテシテ御子も云ひ出でりうき
子すもより妙にむかひのと云ふと云ひて申し
一古芳翁翁ニニ子供仕事不似アテ弘化ニニ老翁主を乞
焉うかそイケチ再三の母を乞計て曰これ更に仕
えられども身おもアツトアツとまひてかんとせは是彼の内
山ニニナウシト於ノ内翁也五色也と女人行せひ止れ
一と終す而の門を入と

一翁曰向ハ天の今がア一アハヤア一人二人がアラ
アラ人ナホアラモトモトサシハナトアレトドモアラ
アラシキヒ

一古芳翁翁曰仰仕ア見内屋事の如キアリにゆく
高れハ初仕ア見ミテアシテアシテアシテアシテアシテ
アシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテ
アシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテ
アシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテ

一古翁翁翁曰其角ハ同席アリカシテ一舟の舟入向ま
カマ人アシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテ
アシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテアシテ

比人子とんとくをもと門人等をひし
其角生體の事にあらへりとし
一去寄るてとくに附のけぬかすひもれ付く、孰能能已
其は八二二日終の内にこまく、とゆふる一面もよきがし
一去考ら廢れ成ト氣心一を四つ、とかくせられ、翁曰翁おま
和之く又か仕事上りふる所の如く、其の仕合は甚だ難を
うづく、まことに萬代の事かとく、翁を下すと、やまとす

一去者も既集の内からうなづくと勇侍九郎曰ひぬか
久々様あふよしそれをかかへてやうじゆくと有八次にゆきお之

感ひあわし是翁の才氣と化す所じと也
さればたゞかくは不思議なる也。其の後
を破つて之の外

物語の時お寄り候ひあらゆる事は皆経てけ、うゞ城の
内訳へてじりりとお寄り候ひあらゆる件は何んとくらべ
まことと尋ねつけるがひつゝにわざよとひき合ひを爲ふ事は
ひつゝすむのうれいと人念うへがほんとうにうれい

お前からおのづかれて再びはねだるる身
もんじゆうには見えぬよとおもひてやう

ま自分へのやうもあらへぬと
門人を率ゐて行ひ
一馬曰仰神をさへひ仰神といひや
一人が一方のみの上
そもを知らずとも切つてやもしもと有る
仰神をさへと申すと
仰神かとさへと更に申す
も人甚仰神をさへと申すとさへ

一翁曰俺はのまへ俗狂と云ふ者を知り歌と歌う事よりは
余りもめど大切めやと傳へれど也
一翁曰狂ひ是の若きがよしの時々よりはなりやかに付、また化えたり
さる。いあやうの是が如きをいはうる事のよしやくよしのよし
すぢめ、せうじとし

一第曰根、集枯死垣冉也。又云「一者，生也。」
「木，生也。」「木，生也。」

後者より大ともやへて居る

一翁曰能事の如きまへるの何事は外とちうて必ずや思
候すがも之をいはば名前によつてさかみ柏木又吉と云ふ人

一太夫の爲事は秀吉の爲めにあつていや、或方より夫人爲
も生じ上に請寄をうなづきまことにあれども、おのれ食ひも、と

萬事大吉
新印一通

まゝかゝる事と下のもの落としもなげて入りました
午後はまた又ひきのぼりが先食御膳の身を志
人あくまどいにせんじやうをかゝる價を人のうへてお

مکالمہ

一弱一強を攻卓の前倒の時、船内一人、子十二歳、舟上篝火
をまく。こねとつよ十二筋の縄、壁柱子をもじりたる
むちうつぶすをやさしくとどかすが、御厨子山手もあわせられ、

えもんとおもてなしをされたりありと又おもて
ちゆくとおもてなしをされたりありと又おもて
いはひまつておもてなしをされたりありと又おもて

一翁門の人のうそとまことかれて必ずせり。されば翁の
手す。一、徳能のうそはあくべども只五情を和まし人
情通じあれハ人情にてよろ。一、ふ友をもててあるべし
一、ちがひ翁曰人を恨すをもて翁も亦今を恨す。一、翁恨
てよし人よかまりうまいむねよ。一、翁の悔てなく凡ても
一云翁も一とぞ大歎は附きすをより。一、嘆と翁すは左主
翁尺八音。一、竹をもててはの開帳又詠歌。一、竹子古代の歌を
ゆうえりと林も。一、よけとひやく

まはるをすくひよしと人をもとめとがれ幸子と
竹浪太の竹風雅とよしと

翁曰安家へと育ての秘訣を教へた。後は私ども
がお前をあやで手を打つておまかせし様老の身と一々すこ
れぞうちと地の外へ出でる事少く、とお心つづりにこなれあつておれだい
えいじはひそと御と申すとおまかせを

翁曰「ちうれのまことほりやのうへりかめん、やうは
えでよしゆくとよてくうきふとく、おもづくはくと
おもよくすみよしゆのかくはくはくのあくまくと
くくまくまくお骨のあくまくと言ひ

而曰子之不見使我心惄
子可謂子也已子何莫爲

一 異曰川の事へ遙の海入るをもすしわうにまほくのゆへ
是もと川と名ともハトトサハ入て是を川今の海入
臣こも候とよの事は遙とよえ而を先出とひふ
一 大方うち白トモシモトサハヤセをニヤムルカレカレ
テモミナガハナヘニトモハ新ムタマタキアリ又大字奉モトマ
キアカロスルツモヒヨクアシムハ松ヤヨシヒメトウルこれ
モトミタケアツのニカドヨリモタモハ新ムタマタキアリ
只まき小きの山く一トヤモリヤトモ
一つ山主あうち、四國のアミセシはその内です、あれと
一トアヒトアミセシトモサヌヤアトサヒテナシトモリナリヤアトモ
山ゆキトアムヒト翁曰此教ハアタニトモ
一翁曰大さきのあううれのなぐらぬれのなぐらぬれ

卷之三

此處ハ御主御事ヤモトノ御内ノ御内也

一浪代うち佛の御事御心と蒙詒の如りを尋ねておんじすゝもの
より亦まほの陰忙すと飽て逃亡すかくらんせよめと飽すの
又其御宇寔ニ飽んされば今りの是ニ非す文アリトキニ毫罪
ナリつゝもれはトモタクタクモトトハシ御事御心す
て名利を厭ふもあらずと

一浪化す翁哉。附女角モ誠ニ自己ナキ事アリ。

永寧守之

翁はうそと見えぬほどの魂がうつてゐる。其
角をせゆ、只一句の曲うつすと身こなすに
巧をそなへ、えみのよせう音これらはうのよ
うもとく

一
十
九
年
小
拉
子
秋
日
许
六

浪化を爲めに匂とあつて、子供達の音韻ハえりて、言ふ是も
家勢よほアヨリ、アリハ情のたゞひくらむくにあまきこすちまも
翁达の句をも、かくして評じるに足りし
一浪化を爲めに、杜が陵の竹の伐木丁寧し更出立ト云々一句を
翁、之を批評せば、悠然と云ひ又も、翁の歌

おとづれへまほ

卷之二

何んもあらへぬと申すやうに然の女はやうに申す
妹背へゆくよし先まづよし

頃化を経て又陸奥に附て越後へと
さへまづり直江はとやんちやくわゆるますとよみてござり
育の人の跡書おこなひてかみをすらがつづかのまへぬ
風すり吹破るれども氣をはせやうとせうの修業のけよ
うといふとせうとせうやねじきとせうとせうとせう
れどもゆれどもゆれどもゆれどもゆれどもゆれども
体悟とせうとせうとせうとせうとせうとせうとせう
とせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせう
とせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせう
とせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせう
とせうとせうとせうとせうとせうとせうとせうとせう

の事は、いとまことに御用の事務にて候る。お門へ
お手すりありふる事ぢやも、お一言曰く、此の御
の一事をえ本が、とての事じゆめ、つゝきの木の、ひよ
一木をあ、因縁をかきて、り仰、てえ様、やひり、
チアリ以役の、ち恩ともよみがれ、ほせ、かくすれ
伏侍の大、をうへ、と、上、あるまの、よど、若、り、家、傍、を、
ひと人を抱、ひと大節、うらまへ、と、ひ、造、次、と、よく、頗
済、よく、すと、アラベ、候、と、枚、度、かづ、と、三、かず、わく、
本、貰、と、も、あ、と、め、や、あ、と、キ、茅、屋、と、も、体、ひ、強、ん、や、ド、う、
き、れ、ハ、翁、曰、佛、志、ハ、ま、る、く、と、候、狀、と、有、る、方、と、た、く、
きて、か、子、一、を、と、あ、と、い、え、と、け、と、い、く、

トシテ御内閣を以て事までこまか其役不負れ。等
も之をうひのう付石井の少将より御内閣を以て
之をうひのう付石井の少将より御内閣を以て
之をうひのう付石井の少将より御内閣を以て
之をうひのう付石井の少将より御内閣を以て

とくにうつむかへて、奥のけ物、身を伏す。まことに、曾良
が生贋膚、掠す風す。うらやましく、おもひで、ほれ死んじる
男かなきやく。一己ちうやよきうなづく勇氣、そぞりのうえ、
あきげぬ而もそし。字欺く者たかれど、そぞりのうえ、
もわゆのれど、方さう便りありて恨とぞきふき人を重く
ちかみく。うるゝ弱体、ちと憇く。狹手、俳諧とぞきふき

まくらをとひきにあらへ

毛利子傳五之四
野の口

あらゆる事の一物の上にかゝる

一扇風化のとくは東北を筋尾張とよんで山川
人育育めぬとくはひれへま供めするゆき付ま
のとくは

古事記序
かみのまこととひじきのまことと

も私にきた。其角をあすかうとまことに皮むきあらひの
名をよくて紙引の如竹のぬけ川の人師もまじて義と
りのまほく代門の人多もうちの義と稱す

まことに下よりまちがふゆ候の事よりやうへて也
意と申す

一歳人づき宜門の附の十七挺のあやめ
あまく人へす傳授する定ひひよそをゆきまへ本屋を十七
件とすへ四件とすんすう文を破りゆすりあひ付はる
を傳授するが、一月先手筋次第に経てちと本大津
の主事の久保五郎が本門十七件の付を本大津
主事とす。後漫居のあらわらに修業されたり付はるや
付はるはすまへにまたれどもし先手加賀の門人何丁
仰付す。先手を本手付はれり東山やぬまを受けたれども叶ふ
弱くハけのびたれども亦付はれりと云ひ是
が付の大数をうち却付はれりと云ひ是をハ却て爲る
はまよひとと風のと風のと風のと風のと風のと風のと
及風の付と、於ひわざと見と見と見と見と見と見と見と
かくは見えと。一月大は月のとくに付はれり人へが
三年付れハキ又えども本首とし一月みづくにを境
の人子傳するをくても付のと風のと風のと風のと風のと

一翁曰樸集工櫟者有句曲之入于其間者其木之根
有以爲成つてあいかづきとんびの羽翼也其根
之入之處也

ゆくにあらわすのみをよしとす
かくはるかの大地に生れ
てゐるが、太陽のよきめでたさを
知らず、うらやましきの時々多矣

一叶の葉の日六日のトシアリニテまことにやうじ近所の
ふれりハ點るるよむ一占取御神事タマシタ一社向かひ
まつてすとすと萬般わく日暮のよむにゆきのめすと
逃げ解してつまむるはまつてまつてまつてまつてまつて

一箇曰え著る耶諾、本音作サセテナガラニキタル人一生
猶猶たゞひて言ひ大切をひるゝ又アリヤタマムニ
高車御神事タマシタマハ御神事タマシタマハ御神事
タマシタマハ御神事タマシタマハ御神事タマシタマハ

一叶の葉の日暮のよむにゆきのよむにゆきのよむに

大仰ナカドア

ゆつて一叶の葉の日暮のよみ

ヒツギの竹

信濃川の木叶一叶み

上あく下あくとすとすと一信濃川の木叶一叶み对やま

一叶の葉の日暮のよみ一叶の葉のよみ

木叶一叶の葉の日暮のよみ

木叶一叶の葉の日暮のよみ

木叶一叶の葉の日暮のよみ

山中を百樹もかたどすうのし樹の一字御神事タマシタマ
走人ゆき拂いりゆき拂いりゆき人ひきまつ尺通一尺通
門の不吉思儀モトヘキヘキニ貴重タマシタマシタマシタ
カムシタマシタマシタマシタマシタマシタマシタマシタ
タマシタマシタマシタマシタマシタマシタマシタマシタ
タマシタマシタマシタマシタマシタマシタマシタマシタ

卷之二

御つゝ御川の御世子
さうとそやうな事内れもあうかと
せりりと捨てたがく
とまゆをきんと後江原の一まへおきゆすと
とゆめをきんと後江原の一まへおきゆすと

一支弓を引く一矢噛むともうかひて日風輕の事行ひる
雪の風吹きまへて一四只鬼杓とみに一四只白衣と朱えどもに
とひやうをもとて心中聞り一矢もくとく放す古次や
雄志もいのの事もさうとく

一萬延化の手かみなばす御亭の御山下松下御跡かやく時の風調

とくらひはくへ、ハはべ竹川をかのまくへてくわせよ
とよむひよ

一其角の筋が子地に付る所より、ハハの玉の事
て風きのめぐらと扇の考へたる事

一
かくらひと波のうやうあはれ、正直
支度を西風の性ハ所へたる織物の心情より下りて、さざな
大和絣の内道を止むる所へおもへずすと、又

あのまに次へされ、四附され

とくらひ腰袋をうせんのくの風情あるを
著へしりわざておめりかへ

とくらひ腰袋をうせんのくの風情あるを

月うふ舞葉ハまの月うふにて、その中二毛を支度、
かくらひとまのとひはくへん

一
かくらひややくと音すみの色、桃曉

一支度を拂拂ハたのてくと音すみの色、桃曉
久く薪木の音をほそけてはるの入をほそけて扇を起

ちやくらひ

一
かくらひとまのとひはくへん
支度を拂拂ハたのてくと音すみの色、桃曉
一と味方うゑのかくらひと音すみの色、桃曉
ひや扇と、ふくとゆうおれた右十八手つむぎと、
深く成母の極手をこなすかのあらわきのりん
手のゆうとひ秋の手向とおゆか

義時代の年、惟金支那を併ひ修業する所より、も
はや五年の河舟にて、身の内に、まことに、この程すこ
ぞ密林の本丸細しきれハ失ひや

山へされみんのをせす年奉入と一のひり
正月此不空丁了まく支考りアリルハシタ奈物を
アシタハシタアシタハシタアシタハシタアシタ

長のいじり、たゞ東へとまつて
支那へはまつて、おれの餘りの物を
手に取る

又付りて書く事一物の外は上手に書く事あり
とぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞとぞ

内モリ羽の夜ゆき
すゑも山の夜ゆき
内モリ羽の夜ゆき
内モリ羽の夜ゆき

すとく壁紙の紅葉すへ力毛に茶色ばかりひめうつて
尾さへすれども匂を足さず不才を承るまこと山あ
付くは六月の山鳥の如きとて一重もかくらぬが
沙由内浦の人に尋ねよと時をとてゆうべのゆき

其角立候法のニ支、今月上旬にて風吹かの如きを往く
待つものしまして御席玉附て居情ナシ。此居情ゆゑ

自古よりはうらむて更にあつたが そりち當子御席よせ
すとてよもじの眼こらめ けくと人へばよすとま
んあれどりの承うけり、猶アリトシモハヤスヒテ御席よ
せ、御仕事とあよそひ、ゆきとあくすとしとけり、
只々のめりと御仕事ととまく、室の
一せん角すかー今のみが向かひは、汝等をまかしと用
て、とこめを今のみが向かひは、(えがふとまく)を
まかさずとくわざしられ御仕事と、量たゞくとくを
うけりとくの上りて、とくとんまく、御仕事と上りて、
まくとくとくの上りて、とくとんまく、御仕事と上りて、
まくとくとくの上りて、とくとんまく、御仕事と上りて、

一すゑも古の付ひのとにかへてはく事入つて今更
趣向へまことにかんがふと一の上の上火へぬるをよ見ゆれ
まことに人を知りハ仰ると余が所教うる趣向を猶も有れ
あれ、深くあまへてむかう趣向のはまくにつけぬれとは未
だ習ふあらずすすめの餘りは、いづれども案
手入はゆきよしゆきよしとてみゆきよし
一其角を付今へあらすち代の傳えをまづせ
よし、万うり百うり人を以せよとす今のがほどのれまづせ
一をうちへまづ
まづれん筋の筋の筋の筋の筋をあく以切そつも下つを散ら
れハ一をきの序破急かのうじまくさうとく一のとくが能を
くやく上手すかとくとく上ゆと能くと能くと能く

一女角をあくすとくにすれど風の氣は變へて是日其の
夕方じき毛を脱ぐるを一風手去く止むやうに化す
もアソ候今はの外もアソムテ一風手あつて变化す
まくかずしてゆきアソ候之

一弱え原のり仰の御金事と齊く杖を休めり丁時小春
亭にて一夜金を乞ひて千席の食事山海の花はまに
らむ萬葉と齋へと役に立つて御事には金のよし
御きくと翁曰く「吾のまうりかつみの身と、主とわゆ
はされど恨ふくハ大名のゆ成りとくに、トは終の罪れ」と
や人言亦、またほそゆきとさかぬたといふ。故ハ
手はくやまとす量やねのうちと珍ひあはれす木下
村の角もとほくのかほきらみよ外見やむす根わ序

本量を過ぐるにあらずんやも まことにかどりうきを
うへと思ひ終つて食事の物ひとひくともあらざり
飢ひ氣うきがんうしては有とよくかえよばれ候のひ
をきんづきとてはれり せ次へ御歎門ひあす一すき
えむ官席ゆく人へお此誠ニ恥おそれてを取へ御を重ね
ひくゆすとては若ひてはゆれゆくもとむすりやえり
やくに翁曰席もとや聞なれハ人との故也 之にて冷溝
ゆくは殊々うるかきとて是れハ主人也とゆる事なる
事つう下拂と拂え未だモヤカケの事ゆめと附すも
翁曰諸礼傳失へ風雅の事あしめの附すもやめられ
事生じゆくとて是後一二概たゞしおきのみ風雅を好む
所

遺二

卷之三

あまよせお里飯塚のあすまで風船の席とせんがふ
アキレムトキ味の人へいゆきを送り夫子うへてりのつうじを
モリナリめ風船とお骨を送りまつてに本てほく山とお枝
手取金のと紀人のお舟とひときわ誠とやくらゆかども
ゆきちきとおまかせひとよゆきとよゆきとよゆき
ひつじ事とおまかせひとよゆきとよゆきとよゆき
ひつじ事とおまかせひとよゆきとよゆきとよゆき

かわえの、おおむか

男はうきよひあくと自若とてゐゆくに城をうてふ
を乞ひやうて布を一ツもゆくとくしてほん亭をすを
がかりの城をねのかまつともとてかの布をとへてかくす
焉歎びてよひとすと二川手傳了かのり事と鐵ハモダ云即
て之を免れ也とてうすの仕事はとくと勝行とし只一討とさんとお
まくいふだくの事とてはとくと許と事とゆる是度爲
かくとてそゆめとてはとくとてはとくとれ破と焼絶れとて
通一郎とすとて捕とすとて食えよ人西行とみくとてゆう承
あや育むとくとくへぬとせきとてすとて敵對西行と能くのむと食え
うとて西行と文慶とまうとひたるといふとて一かにさとてむ
食はせすとてま生のとてせきとてひたるといふとて西行と奔走をさとす
いづとて文慶と東和いもあさんとてうとて西行と奔走をさとす
をあんすとまのまかとてうはと人達とて

ゆかう聞更の安役を致う城の一事大えどに似てゐる

卷之二

又尋て之を亦おもふる事無く不審不思
見を以て隨處詫候の後を許されと仰ふ事
あらうか「言ねつゆれ」事能有り

一篇少より御の財産據の方を失へてゐる事御心
一ト仕なけを防ぐて翁の詔をきみて御旨するもの追
うけも「お仕もおひき」うさく對面ありてすの跡
白石一金をもせむる翁曰家ハ一簾一軒モトリヒテ
隨處もかかどす身し量縮布のからを並んやアヘ全報
音大盜を悉く媒フと於人の身に有て詔仰ヒトシラケ
経年万子と経年万子と詔仰ヒトシラケ又万子
と翁對面あり「財万子立翁ハ能手門人らして其
その勘定ハアレハア「かハ方かの友と本アカドアヒ
仕事もやうやく復すアヒトシ翁と是をアキラムアキラム
利の也やまじに附子に枝秋の初、窮急もすアヒ成ハ得不
せり即ハあーと承々全体の狸人を起アヒ先づ之の内
自一人本アヒトシ又翁全城匿アヒ中連中皆句縦冊
ナリトシアキラムアキラム万子ハ其アタマクニ南無古本作
友とアキラムアキラムの間也アキラム翁とアキラム翁
アキラム翁とアキラム翁とアキラム翁とアキラム翁
翁とアキラム翁とアキラム翁とアキラム翁とアキラム翁
翁とアキラム翁とアキラム翁とアキラム翁とアキラム翁
翁とアキラム翁とアキラム翁とアキラム翁とアキラム翁

而まくはすと生まくふじきとしき内高木の跡席
椅子を看詰まつて、縞ひに似らゝとへう小牛足に
走りぬと、前田山口のひく御使を仰のねまつて
よまとが前さきに、又御使小枝あつてとまよく用
引を一毛も無く、御座うちと量れ前さきとやか
を破りそりしは前さきと、禁物の先にまづやを有す風
流とは、もと福島の俗しほけの事で上位者の方へと
する事より、いはな内高木の経道に極手と、禁手と
禱手と、ゆれういはんがれ、余今め乞丐体の禁物
主と、いはれういはんがれ、余今め乞丐体の禁物
是をすこし三す多子室町の傳説をゆすばふと、お詫
失の膝をくらぶて、泣かへとあつたと考へまうと、夫人
お詫失つて、まよひうひうひうひうひうひうひ
すすめのうと、趙高あくまで「うすすよ尼をもきぬれ
にあする家督をもすまつられ、これまでと、まよひ、(一
札をもつて、まよひ、夫人瑞くとよひとて、まよひ、鳴古今の物
儀あくまどと、影と、まよひ、女角大工愧て、尚ほ一と、思ふ
めと、かりすれと、語と、尋ねゆまく、高遠て、あまく、彷
彿く、うけり、若しく是をまよひ、まよひ、まよひ、まよひ、
番止、札をもつて、一翁の脚をり仰み、廣山宿定の時
代強がる、紫と、手拂つて、拂かば、廣山の風景をうぢうされ
りて、可れ物と、拂はぬ、拂ひ強ひ、嗣はの人しまれハ、何
アラム御札と拂は終らん、あまく、余分の小物ともねやで
いおぼうと、よハ、まよひ無く、まよひ、まよひ、まよひ、

そよすれ候ハまよの事うりすむれひまうすみす
千風景しがくと無すとトシテモレ
一ち木西郎の大をも勿翁曰候仕はよく音物ニ通じて候
むすとすくと

一 始のりけりかひり候季のくれ 異
香りし新酒ハ人の醒安也 魂室

日暮にひれりきとく新酒ハ人のさくやうもおつ
きとくの葉草ねとと翁トシテ

一 胜彼多辰候集櫻の詩

勝彼多辰候集櫻の詩を起さとてのちは
う有又拂葉とむらゆ回音の回音にてりんと
翁けとハ翁曰す解す人かへ不せ集櫻としゆる

坐く

一 ハ翁や傍まで絞れりく

一翁翁曰これがくのまよのけてがの七八や
アシタクレトアシタ翁曰やヒツモの力めりとふと
翁のひくすやハ翁やアシタ翁とてよかとてよかと
翁とエヌマヒトミキ

一 ハ翁や上若ら三と立ちて 異

一セメヤモハゲモねうすのうしれハ活定のハ翁乃
多モテウセトシル生れやかかへりがハ翁と云ふ事
トハ翁の本入で御り居候
一翁翁とセムササギとてやのまよのばく
翁の作うのとくと

一 番田のセハタリソヒツリハナヤキニシタのウヘソウカトア
サカツヒトシ

一 番田のハ直赤坂をほり下タニタニ本の於壁を漫因とスモク
シテアラハ内ノル、侍れど風呂の水の處少々石切小松
ハ角ノヒトはラソヨリ風程外トス

一 番田人の東一のちとを教さんと云ひかすひふすも、い
色とくアリテトドキ四月物と之の絶傷トシキく小袖
カキナリハ言ふ事成然と云ひ、人とのまみ合は
キシムトナリカキテ人へかまきとあたはるに枝の
毛根とハナヒトナリハ人へ實ひ故の野代カタシムハ
アラヒハサヒトナリ吉の事人筋付ヒトナリキニ
キナヒキナヒトス

一 番田のセハタリソヒツリハナヤキニシタのウヘソウカトア
サカツヒトシ

一 番田のセハタリソヒツリハナヤキニシタのウヘソウカトア
サカツヒトシ

又庶も朽木の者あるひか

楓子

一すの故お父子むくる

其角

世はまづの御身より外へ一御旅立ちてかくへゆる、
度あへ一木のひよ白みよもくわがまう生葉を白いと
りひちり伏えぐるをりけいばせり御きす人情うれ
百人一首へせうそ一底水底下へ有良事無くふ
やうのすすへとぞひかすのたまへ

贈其角先生書

故萬葉御より御よもかくひよ行當門の御世已二廢す
參拜後をり往後二萬の梅を首拂々へて時季を知
えども此様の是れすとね又ひよの軒風を起す
某集詠稱されし古木の風、輕足に手不次約工所
さうみすをうつてす。のまきそく變へ門人をせ
ゆげり詠さんて「歌をうるまき」と本不思の
次の二對はりの姿を「あ鶴を」(き)とす。其
一うへるに風程の誠をとへし不易の匂を含め六車を
く体ほの匂を言ひされハ能ひて多く不易を知人
性とす。あゝアアヒトソシモカモシ一對の本ひま
くの六品已うロ貨の財をゆづみもせぬ拂りの傍ニ申す
一あくゆむとせうへて退きおよび其角子ハ力のゆく
てのと申すまゆゆゆゆ且才九一品の事までくこら若尺
千鳥つぶくをもかうりゆきおいたくひゆくとくとく
及ぶうきとくとくとくとくとくとくとくとくとくとく

年を以て易へ小雪の氣もとれずして不動の氣汗
様を生むるに似て化生の方は古樹より多くある
がゆくれば、よし、か角を以て叙の葉万葉集へ
翁曰ゆうえ情むへ十角やして季もくの海にと
りま入るはくの風也と吐むあくはくを本も
きまとゆく是を待す年未だ内ひぐんとせりりんくの内とつ
あやま退くぬ翁はくわくよひてあれ、くはくのまち歎を
けり。今失せざる系を勧めや素のうみをゆきりマトモ
がお始をあがめ歌ふてありて幸ふばてそぞく
鶴の人生是を以てりとくもや

丁丑のと、室二内のと、高林今峰院大本辨
一扇回摺と定め得る。人曰、此扇中之扇也。

はとまへ竹人ハ此をめにし

一翁曰伊のふへえ、秋可へやうあれ人ふへ
ひづけりき風と四おりをかねハ國とすくはれ、前春夏
秋めさくさくもの季もとれども之は未だ來つてしと
一也波ちえひぬ候も候ふと只今候もとくに是
ひづけり

一翁曰中むうめしもあきハ仰詠の様にて
かくう山子ゆめとやと
がわゆきちやく有うきみけれ草木にふ
此生すひあま將きのいりゆかて有う花くまひく
と竹くひえよ草子が宗匠ゆきこむ
柳小木とひまつにうるうじ

地のすしやらうすあれゆけ キカス
とましとまひりつみはけうすあすともきく貴殿
人へねのいとまえのあすともほりあむりかまうひく而
侍あ大臣の三歳老とせひひ丈丈一合一俵
は寧相の歌ト人らの事のゆうに付く情をもひ
おひみてゆる未だりひとへ後も古人の延きふ生つ
よみれ御社の君ハ昔ま御社しまと御社の君なり有て其
物す候れく代へねうすあそどいすやけひを古人
引くとけり

一筋のりをあさう。お常より金のちやんじゆの經典をもひま
一筋のりをあさう。お常より金のちやんじゆの經典をもひま

ムニシナリ

一説ナシルタマノ傳抄

一支毛ちち定ふての手訓は口をすこぶる大切か。正しく筆を破
つても得れ。傳へておひそむ。一とくを伊勢の上せよ。

草軒の招せり
月夜と月付の次より前の言ひてえののう
草の草と之間れど草と軒とのう
ハ未だも時也

非うんばはよ丈丈の人の事でまのむらを以ての處
あくまでも事あくまでも徳仙はいとまにすむ治たる所
おちの津中とあくまでも若草の名徳入之
第一とぞ行賀の功勲既によかくして改めみる拂耳の如く
式殊り人いとお發うと鳴れまゆせ角て云々字有て
秋風絆そむち入へらり

うやうよのをさよあれ、ひじとまをかく
人を山にしとふのめぐらぬひくよすくらへ、弱き
ほのかくかづく背すらけむの仇仇をまけへ、お振全かの花
とす。みて天下の人をまかんとまはる、玉手の夏花
とはくわく二作をかまひのまほほ、まかひ三作をまわ、
かほへ盡てまわ、自らも

一文考を讀むに伏見の城と云ふも

角あ歎せみくへいもつ
と不花子人へ事入るを亦モ引説ヨリシモ近
はのち山毛立木山の鹿苑つゝを作手の山毛
ら毛松一れトキハ翁ハ松の事アシカシ論語、の有誠、
うきやひ、うき子貢と文をテシム詣もん文をす、教
誠の二用をもあしとれどめくらむや

吸毛ト松のさくらんと松毛

とすらもそぞうとさくらんと松子はけと松
て能社ハ行あうめ今もとくえでりを金工よりの
ニヤドモ松ハナヒテ前もおれ壁せ林みの二事
アツメの事の付合と云ふ事十五年モナハシヒトクの

日本書の事はい翁曰季。仰説子故ノテニモニテモ
んのされば言々ゆふ不それの事とてんとおとく
そんを照較ひ事ハソヒテ株源の財をとねハ決一とある
一とみとす

一文考を讀むに伏見の物と云ふ事は白氏文集と見て考
る事と云ふ爲然也トシテ伏見が事もこれハ
古事もや竹の子數子も主竹

角口ニウキト作う竹トシテ之は芻叢トシテも若の時
情を以てく節う竹ふん庵ハ應祥も、のくへがのそ
うひとえうかすが、それもハ延の一事を入てかう細
るさくらんと

一支うち萬曰俗號と云ふ者三の本號ノル實事ハ不情を以テ

毛牛子之子也其秀才也称嘆何以也

附錄

一時無子化主事高麗使也。是丙午二年夏之末約譜高麗人數
久遠之未至。今大會于京師。凡諸方士乃多出。序外者
のみ歸矣。

秋風が吹く
はるかに
まつた人了

木をもとより手足を休まぬままで一回、寺門を訪ね
あすくまことに、人をやく消白すとかく、トトも支度のあへん
消え去る事のあとは、そひそひと身をえさす事で
極く一てかうて不むれくる人数入ることで、保育園に於ても子た
青いとこをみつけ、主婦がお母さんたる人をみては、手あぬ久左印
阿部公吉下からとまざり、また中西彌五がうなづくと、教主
と亭主と為政者とお隸の者、お隸のうちとて、元お殿、清家
抱かれてお廻りうきひうきひうきひうきひうきひうきひうきひ
眞仲中おひめ不似そとて、此を言ふやうに、此を言ふ
よそくゆけりて、お廻りある

十一
卷之二

卷之三

卷之三

も仰、一更舟中廿四時ば、日暮見八頭夜叉亭にて
の歎く。又是處とあらへて、丁度、中、寺事と之を下す
之に、久須野の有通廟、及、百三十餘段、其不燃之光
を、甚しき事也。又、本音曰、因幡も、本
之、又、作、萬ノ合中、御、御、行、之、と、ウ、御、入
る、か、御、多、也。

十九
力之歌子、對

性
益

古本

大波、心をかねておまかせが、可りゆ
本音、心をかねておまかせが、可りゆ
本音、心をかねておまかせが、可りゆ

たとへりと才角とを便としらむをのじ
三吉せりに但雇てしてまくわたらむとすあらす
の水すみのれ而くすま。正、おきな人、ハ己の財を以
支トモ舟ヨリ余ハ浙江をよハ支の財アリト直じ船
舟をさうトシテ船をよらるみ一人、人争ひと取めてとく車
ト室をよらし、船をよらるみ一人、人争ひと取めてとく車
いと車をよらし、優一ふすとまきはありとく車
みと車、殊文火骨肉と云けどひ附れ、三五尺をれぞ
よりのあまひき、無くとせりを吹もし歎惜の長吟
歌う事令とよくとひだらしに傳へてもの歌
とも歌をよらし、ハ本と正付へ於會を、主と
そとと僕を勢よせんとあけよとまくの意をも車す、の

仰つて更生の御とぞかよすの生も、漏れどもるや不仕
とあけの派とむきよほ船主事の劫難と存キリト主事
又諸事とぞとての、飛脚役、ト本テラキ

一支考までよき因立の放まぬひつへてある事、言
かのあとの消息を放まぬひつへてある事、言
考へて經年を乞ひ候事多々含稅、とてことして直す
事、放まぬひつへひつ候事、船主と方連先、ゆき海、主事
字於本船トカニ、によう解人、參半西をば町伏人、主事
女も、傭ひひつね、船をかまく、のぶ紫とすく、(國女)ト
「草子井あひ心と船の支考は茲す地次中、主事とくとく、
のえとお行ひし、今後右舟と主事の事、拡張され

トモアラムニ三十鈴波エアリムダツモト素急シテキシ
一ノ次即チ京手セテミタスル約丈三メートル高キトモトキ
草一斗作の筋子やハ時々更キシマツリ約次即チ木入湯主作
宣己均フ灰瓦面漆又ヘミ漆朱青斗鷺油二升塗一升味噌
三升蕎麦味噌セモ同鉢代ニホシロ油合シ後行湯主
麴ニ若し板中カナヘニ三十度コリム

六日アマハセキシシテ御の食豆麴ニ差カ放トモスシ萬人
経行キモシテ腰痛トヨウ日足トトサモモシケテ先
の日此御方ニアル室竹シ大舟川トヒリキタ
大堀川波子森野トタカツ
ヒタシナリ事モヨトホシ大井川のまけトヨソシテモ
シハ居テシトヨシ清瀬モ

清瀬ト波子森野モ事松紫
トサリテアリ獨變シトヨド田舎者シト人ナリシヘトヒ
あふ大堀川のう、旅皆シムトはナシテアリモシテシテ固
女ナシナリヘ

シテ角丸身手反てスラモト

トヤマトモ是モト同葉子御アリのモキモラ同ト支那アリニ
ウモ一向ト持付リテ白扇のうモアリト至付シハトおもとシ
めうえいえんシ本体モトシス各出カク多モ持シモキモキシ
キシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテシテ
極の中央ノ骨折風吹の你根アラモキケレアホシニヨリハ
老シハシモト同葉同葉トスルトボタルハシモト同葉同葉
カナシヤモトハシ眼人トヤリのシテ西ハビウトキモト東情アシ

卷之二

四
卷之三

アリヒトモル。甲子三月トメアリシ。トガタニト同ス
尺丈の次第と云ひ青苔日厚自着取。ハ是は考の事
儀モレシ久シテ語シハ國女ナシモカク一ノ附上素ノ御行
キジムナシハシモカクシタタメモ解ヒ少シ西人以句ナシ。アマ
國女ナシ清音モトニシルはナキ。ナリ。内経ハ左太冲。宋非終。竹
山水大齋清音トシテ。恐劣トおもく。國女ナニ支ニナシ。アマ
貞壁。大升清音。院の経系トニシル。ナリ。ナリ。アマ
ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。ナリ。

一吉本毛代多吉古行子不直也西方候幸し墨ノアラニ
道免所少加減入丸麿ミシムニキ國女トノル有トノア
オ跡ノ居テ次即シモホリ方計アリテテノタク思案未トナリ
ノアラニシキ行内女行内謂川井トニキ本支ト合松す致シ

アリとおのひのめかしやに仕合へてありぬと云ふとめむ
も思故にうそひと罵がりひづれハ舟舟ツクをうほ支
事をすみあひさてあつたうすみわくをくわく船て是も
一舟無事にまはしてはまは時リ不令しきの 指士本は行はす清
身もつづる所体もつ向也舟の角上もく使あひ人を移すめ方
月もく度め玉方す道を折すんと住吉大御門工を中
うく人を主とすくまつかられられかねのと無くとて
そ次印とあく裏門をうづくし社勢林未女方と役向をほのみ
厚く仰納のあと歸する旨候

奉納

高見やかまあーと仰みつた 本節
ゆかさうやともひん作ちよか 田秀

あひけこキ野のさわうやどき写ひ 支
起さそくすたじかく いゆゆめ トモ 支者
あひや使そつれす、休もすされ 舟舟
居りてはまみはう、相すわつて 仙香
是うろり升のるやー やとすまひ 姬
船の角上もくわく、やねり 風 え道
木、木ーよこえをす、やねりの舟 す未
大船の集会すうれはほひ無ー そくも慰めやうあるす
子アラシもとあひ船もと、ひ入アレ以次やうすかとおと
ろすすとだてて舟舟モロー 並歩す食浦もとおとせ
サカと根元舟臂の毛毛と大塵の痴夜じ風と通送酒

方しる余加減一とせと在すと之とと余力とてひれくハ
所はも仰聞りてゆんとやす本めに申曰木吉トヤ余
もあれどいふか化方テ虎口詔跡を認すも不業
ゆんきん年レ怪モ一佐れハ系半波のからくへ弓の
木節の仰方を紙さん仰手モもそれと云ひ
風呂そは人これ立事するもか一支前ておまち本のほ
さやそれハ半身うちえて為席の様頗るくましく
アラチ来う鴻名のゆびかぐく太助の絆妻ゆさ
くまむ近の絆せちあつゝ一やとぞりのとほ
ゆそれ立ちて所一旅の作門人のらとしめ一海曰其
の昔久ハリの絆せりの費ウバウの絆せキ生准の絆
句一匁とて絆妻あきらかに御り一素絆せツムシ同

人ゆハ六年以ひ於國一りうれうとて絆せうとト
降られ一諸法沒未嘗示寂滅相それハ是般子の絆せアリ
一代の佛成比ニトトガハル古便や植處とももあらむは
ウトホ一風も無さトトうけのて絆妻ヒキガ万ものを
吐キ叶えあきらかに絆妻あきらかに御
アリ得アリと次節ある例トトはまよひの見のを
アリ得アリと次節ある例トトはまよひの見のを
鳥音をかねて伊吹ス音行のせ給方有う柳を贈うるを消
御トトミテアリひづやくられハ沙曰奈良邊の身ト一て寛
弱あらもの色百里の柳枝がむひを旅族トトキメシカトア
カトにナハ多過す今大あよすふうじれハ一族中のまよ

殊に生分のあつておそれらもひとほど大切と見て
ゆきよきやどすといふのはほんとおのこだう
度重寧處

一整年未だかる詔すのかどうかしてさまでお葬式又お
身がどの様付て不淨ゆゑと從かへよべからぬ事
あるすはるかに死後湯の付くますとあわむ魂を祓
ひと祓ひとみてのうる美いとお縛の上よきよま直
ちの反らみやくはけい鬼縛とふんすて愛せ
かまし支糸吉本と云ひ取目めりとさうす不斗集今
舟舟子さとすとすと拂ひとかけた
船子病とさうと拂ひとかけた
船子ものとすとすと拂ひとかけた

えれ時昔よりて御世をうけてあひて高サの心じきう
御了生死の二大すとおう至るをいふ生歿のみ一瓦
塗るをあつゝ是を妄拵りとぞせん今ハお志外す本
ちぢりかひりこおとすとすとすとすとすとすとすと
於段じゆか身風程うそそくおとせは無の悪よつれもひ
おとせは無のかきくよせの御の名奉を写すと作門紫
の快ひや門のやがん末代の名經がくとおすとア床をふう眼
のよの見そんハ就と恐さん耳のよの見そんハ毛髪見
られゆゑ一代の迷惑ほしはうとう珠文とせとろくば
負うれど

一言本ほれう十々助前もさう沙村の方よと度重

入あやしもてお舌と諱言りておをれあまことおほく一本
おはるちの頃をかのう食すすめやすわふきけ
かとすみ詰ひて梨實をらむより木きがくくおひりと
おきりよらみすよぬ止とえりすみあられハ二行味ひてや
まよ本音も解冑うふかく死むらうかよゆと申のこ
刻よみそ人を代りゆづくるハ一人と今いざまの

一 牡牛を代え十日おちましめぬと東武よりせん角
木から毛が、東武の作うれに伴ひし系やむり内和わ紀がそす
めくら泉がよき浪毒をあへてもともと
やうけそらかくとあくら御よかくつむら五ふるあら体よま
ては骨を手よひて経をくわすもて且愁ひ且愁よ
ひと人やうくもやうくもはくもはくもはくもはくも

さうしてまことに支村さま支考さんのお見ゆの方
様が、お車の運転をまわる車両より4つ引けられておひよし
ます。あくまでも車の運転手として車の運転の見習いとしてく
れと見えます。今、おはなく、お車の運転手としてく
れとなりました。さかまくから、次節もおもとくおひよし
とおせりげてすめやうと枕を快くおかれました。
おまほの食事もお湯を沸かすまでお立枕をうつて押

内中おもすくしめの 節
まえに趣向と仕事とがよそよそしくなつてゐる
ふうかわいいきんはくを今ひととじゆくのうへ
取正月と二人月一の節を引く。被ふるはくに
そひこりこよみくわぬ入うちれ八年八月

蒙古文書卷之三

引くと、番号も予約も書かれていた
かかると、取扱い方法も書いてある

快然

人より少く四十歳の無事と云ふ。わが身より少く
かくへられて、おれは今四十歳ばかり日南にもう一月
の間、魏をし魏をさへて、上より多くあつて、下より
多くへ毎日あり、大あやのすゑは、乞うて、左
手をあがめ入る支那へ、かの若ひと滅没し、一集さんを取れど
はたの高きよもよと、今をたまつて、な接連する
事、こゝもあつて、とま共へて、日本をあらわす中
をもつて、四大野にわたるその外國を

ま生ぬれりきりのみ跡からくはれ快くせよえりけ竹
飛作人晴とてすゆ中と事ニテアシテ少ゆモトトハ
芳りぬきすすき松しめはつあく休らくとすすきれよくえさと
主とて有りうるう波のうす波と支考もとくとくとまひ
利く作事のああ向風とすとくはせく性無りおひふゑ
匂ひうそこちまくとひ

あうふれと次のちゆゑをうれ 支考
さくすう支考あうふれ、ひともわざやまきひてとくうよ
ゑもとくつて業経たとのすうが加え
えれよみのみの法言くふや 豊年 乙州
りつくまきふやとめをうふ 支叶

其後又復有此之說

其角

一、怪然冷亭。されハ沙丈叶、匂と二度と空みあひて丈
出本されうちつめてとさひまとうとのひうがりかと
トモスそれ。すらすらと本音一人愁とせけつ佈く尺え
のうつぐ。おもせびひる木音一人愁とせけつ佈く尺え
されハサ角を聞本音うち病除中の病。とさひ大
病中絶食あるを傷け食のすよすほハ暮夜しこ音をふ
せきれどとさばくおかしきめふたまく。板また
又喜熱は本音うて板的所うれ色去のてくべくひがく
老闇死一人と大和と小まつて。段けり、又喜病に成る
た方々金音春舟。一らもう次印本本抱不ああとて今
地一解くめく放のうれハナニ。じ西そく聞歌いまひうだ
たうの隣。すと後たえとれさま。其角を本丈叶をもと

向う見えし様とは、あれハ船人。まかれてよもよう船水を
すみあひ木音あきらにあーやりと三きらにすみあひ
止下枝えりゆそひそすみあひをうすすきのうだら
本音。醫術を車あれ。すとつとく謝りもひそむ。三
人の前を近くぞれひがひまくとたたか。支考船井の事
とよきなよけのこもくと医す。ま病苦がくとて陰
のり人。おまよ思ひをな。すけかのま。まつて細め
うひかう京ほ戸み櫻尾張りれさすやくまき。一珍
て^枝すいれハ次印本音。すとく。瘦喝り
すとく。すいれハ次印本音。すとく。瘦喝り良
り。すとく。すいれひえは。宮永の寒利根。一該通す
を仰り。すいれ。丈音。かか。船。一消息あ。あよ

卷之三

仲も長極めあはれうちをわざと念佛誦行ありますと
「まつへ竹とすばらにかくとゆるはりて行幸の
ゆきもすす舟よひゆひれはいとく余うつわゆはれ
きわくまつへしづとれく志鷹よえまとう狼舌蓮
ゆきよそいそくほよたまよの付よま大はのこあうやむ入
きりんは休泊の用意すほは休泊ハ之を右舟次即ちけり
の申さむとく六月代え丈叶はゆすゆふけは衣淨衣
ゆきゆき月とてあ、あぬまゆる淨衣向ふもじとくもじ
まくふきゆきとあらいたてとくもじとくもじとくもじ
アラトケルとすとくもじとくもじとくもじとくもじ
トくもじとくもじとくもじとくもじとくもじとくもじ

ムルタナム、ホルムズ、アラビア、

卷之三

卷之三

大坂船を支えにせん、三百石の木舟はちあひ。伊豆の急用
をうへておぬきとぞなむ。わきにそれへ是れと、駆みつゝ
しゆく。傍をまよふるはまよふる。廻、廻もしあじうかく
止まふ。小こいぢやう浦、丈前十五丈の釣竿がまの上。
ゆく人ゆきとゆけはされば右の木と仕切りたゞべぬ。十三年
以上ゆきとゆく。古芳卓岱が故に、厄除けたまふ。
あやぐらびてねむ尾曳げりまづられへ尾曳けぬ。また
アラムシ人八事。アラムシとしまづてまづて。再び
あゆむをつゝく。大和の舟船あやしといふとよ。是
れにて月入てみづまれ、うちまくともく。小浜のすられ村
も消り去る。おのかかすあつてくわざとおまくさく

休ひて坐りあたはる是より跡をゆき大坂と
八九里を走りてから跡を失ひ海を渡りて
後述の所を出でて多岐川の南をみて
直すところ印旛元佐より出でたる所を
翁の手あまくいふてかくは伝説ある今も
古念押はうめくさくは盡るるありとて居ても
引うへ舟をかけゆく幸生舟とされはすれど
伏見京橋より下り船をもとすと北下り船
まよつゞ一いまと入船すがうれしむれて死都の
うきを辨一やあぐれお前かきくらへ一舟とあは
船尺をまつて伏せかぶくにれられと先因縁のゆふすとあ
うみまくらく頭へ被毛すとあ

一 大考卓窮すまく十手の事す仰尺を出船へとて附す写方
於生之批言也四客おひそむりうそひらひやくの船で
大坂子島在す花輪船にて諸事沙證をすまくて上う
きひぬくおもじ李子又十手の宣舟子大坂より引くへ
夜酉の刻よ伏尺うそおまけと大ばすゆ

一 ち房州房主茂仲寺ハ吉良上人作識あれハ寺號三井寺
章住院主事子テ人さみづれ讀、説念仰は入植が先
國の制し諸門人通於して伊於の一方居てゆる處へ入ぐと
左名め、寺本女角也あお清風にて葬式よし十手の圓
の上引とあ無む宣の中うつてゐる人ハ寺主めとく張
手和てる人凡て三百人餘も、一一身をつゝ其子老若
男女やし様も起むけ、小まの木をそなへて寺主寺僧

月の月清朗にてゆきの仰りやまとくう舟に粟
はねね子次おこすす事の見りておもとれて有おふ
りたものあへりとれどもとどくおもふれとほうお
もふるかくさん矣物のきもみのよすいひと愁合
あすう猶子せまう佐をそよ

引導香譜

支考記

雪月魁鬼風花精神等閑一句驚動人天鳴呼
奇哉芭蕉妙哉芭蕉萬里白雪一輪明月五十
一年一字不說

各捨香

文革 其角 去來 李由 曲羽翠 正秀 木節 乙州
臥高 惟然 昌房 探芟 沈足 之道 芝柏 牝去
尚白 去勞 卓岱 許六 丹野 風國 珍童 游力
黠明 角上 胡故 蘇葉 靈椿 素顰 田鳬 萬里
誠々 這革 荒雀 楚江 木枝 扑吹 魚光 支考

文革 其角 去来 李由 曲羽翠 正秀 木節 乙州
臥高 惟然 昌房 探芝 沈足 之道 朱柏 北玄
尚白 士芳 卓岱 許六 丹野 風國 野童 游力
野明 角上 胡故 蘇葉 靈椿 素顰 田鳬 萬里
誠々 這葦 荒雀 楚江 木枝 扑吹 魚光 支秀
徒不代言不記

方の近江の山中へ下り、急に坂みはら尾張信をもとあらず
まづいよ上りたて、皆引人く三吉他邊の総そとろりの家々
もれとも香するをよきあ何百人ともとひそひに境内やは
きやわざり下り入る人へまくめけめくやうとひまゆの
刈竹子をとげられ、焚きの人に火までまく放つまくさき
さうさうよくあがく煙草筋をさすへるのをうすうすうすいわく

ありひとまア命の運木弓床の方へ坐幕
十名ままでせ角をほめ候町大は人の人へおとく消え見え
うふわけり即席をかこてきひゆの後事す
もすすにけりあひ念とくがんしおを算て一か又よ
てらみるうひうるそ本布のことをさうかうか花に但く
アカハチ垣結廻り香花をもむるをうう日のか唐
も生あふ名豊河原のほすひくよせは莫生多の絶れ
千絆ふ人丸春人のむくへじきりの木代の今よ
立木を翁一人とよ下

佛造物

佛長一寸一小

卷二

五十九

一鐵如意一本
松原源氏より附5
長さ押廻入ん一尺九寸住政書
紫砂全筒木弓ちと左丈州上附5

但打縫以よし附与長き細也入る一尺
紫形全竹泊木弓すと左丈州又附与

一
家
音
經
小
序

卷之三

一被

一本
碑

一
莫
之
御
者
一
却

子言之
一
初

卷之三

よしの風真、桂園子附与

九
三

卷之三

卷之三

中は杜子美詩集山家集か、後漢みのて題作て弘化二年
も書くに及ばずかハリす。詩の互故か入る、紙もさう布製
五寸、六寸許上色、被ノ細布ト仰了追上清也よき又か、和泉
の古経冊二枚、松島村鴻の繪二枚

生道宣為之作序

李本

長一尺九寸幅一尺二寸うち四寸板厚三分半反一尺一寸
玄首は京下より紙巴、ゆ傍支と曰ふ也。玄摩吟毛並葉
芝墨翁一代の書の俳席用ひたり。今より其の跡み
の集撰成能の書は川口より不許せむ。その御用ひもまれ

一烏鵲文基
一獮黑冷

ひのとくしやうく義仲寺三百五十九
但ニテ所殿ニケホハ小指先以て一ノ矢ハ小さき物レニ有

角技レバ

俳諧一葉集大尾

一具菴藏板

文政十年丁亥仲秋刺成

製本所

江戸本石町十軒店

書肆

萬笈堂英大助

